

### 第3節 あゆ養殖

アユ*Plecoglossus altivelis*は本県ではほとんどの河川で普通にみられ、内水面漁業の主要魚種となっており、漁業権のある河川では毎年、漁協により種苗放流が行われている。特に天降川では稚アユの遡上が多く、県内の他の河川や県外へも種苗用として毎年出荷されている。また、池田湖の小アユは1929(昭4)年から1974(昭49)年まで採捕され、種苗として出荷された<sup>1)</sup>。鶴田ダム湖では県の指導を受け昭和40年代(1965~1974年)にアユ陸封化が進められ、指宿内水面分場が生態および種苗化開発試験を行い、現在、湖産アユとして県内外に出荷されている。他に大隅湖、鰻池にも小アユが生息しているが、利用されていない。海産稚アユは出水、川内、志布志湾沿岸に見られるが、資源変動があり安定した生産はない。鹿児島湾奥では内水面のあゆ漁業との調整問題があるため採捕されていない。なお、奄美大島には、小型のアユ(リュウキュウアユ*P. altivelis*の亜種)が生息しているが、近年、生息環境悪化のため資源が激減しており、県では国の委託を受けて水産試験場指宿内水面分場が「希少水生生物保存対策試験」を実施中である。

#### 1. 沿革(本県における発展経過)

1935(昭10)年 県水産試験場、池田湖の小アユを鹿児島市宇宿の柴元養魚場に1,300尾、霧島村の椎原養魚油に2,200尾放養し、人工餌料による成育状況調査を委託<sup>2)</sup>。

1936(昭11)年 県水試では枕崎水産学校の養魚油に8,000尾<sup>3)</sup>、1937(昭12)年5,000尾、伊佐農林学校の水浴池に2,200尾を放養、飼育試験を委託<sup>4)</sup>。

(有益な試験結果が得られているが、その後の展開については不明)

1962(昭37)年 県大口養魚場、あゆ池中養殖試験を始める<sup>5)</sup>。

指宿市で数人が池田湖産種苗により養殖に取り組むが数年で中止(聴取)。

吉松町竹中池で同町の数人が養殖を始めたが種苗入手上の問題があり、一年で中止(聴取)。

1963(昭38)年 有明町、加治木町、垂水市等でも始まり、1968(昭43)年ごろまでに普及していった。

#### 2. 生産の状況<sup>4)</sup>

本県で池中養殖による生産量が初めて農林統計に掲載されたのは1962(昭37)年であるが、1969(昭44)年からはあゆ養殖については掲載されていないので、県水産要覧により1971(昭46)年以降の経営体数と生産量の推移を図1に示す。また、1996(平8)年における地区別経営体数と生産量を表1に示す。

図で見ると最近10年の経営体数は10弱でほとんど変わらないが、生産は約2倍に増加している。また、産地と経営体は、1996年で7市町の各1体となっている。

1995年の全国の養殖あゆ生産量は42都府県で10,896ト<sup>6)</sup>。この中では徳島と和歌山の2県が特に多く、両県で約5割を占めており、本県は13位(125ト)となっている。

#### 3. 養殖の方式

1) 養成他 県内の養殖は池中養殖であり、50~200 m<sup>2</sup>のコンクリート3面張りで形状は円形、長方形、8角形など。水深は1~1.5mである。

2) 用水 地下水や湧水が利用されている。

表1. 経営体数と生産量

| 地 区  | 経営体数 | 生産量   |
|------|------|-------|
| 阿久根市 | 1    | 0.7トﾝ |
| 大口市  | 1    | 0     |
| 指宿市  | 1    | 17.0  |
| 垂水市  | 1    | 27.0  |
| 牧園町  | 1    | 68.0  |
| 隼人町  | —    | 0     |
| 有明町  | 1    | 40.0  |
| 大崎町  | 1    | 1.0   |
| 計    | 7    | 153.7 |

資料県水産振興課（1996年）

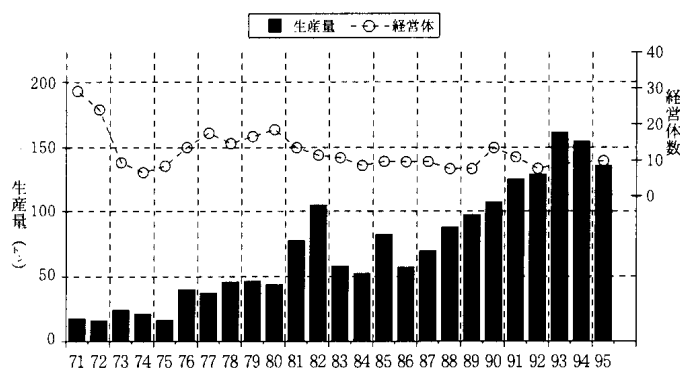


図1. あゆ養殖業の経営体・生産量の推移（県水産要覧）

- 3) 餌料 1965（昭40）年ごろまでは小麦粉，フィッシュミール等の練餌が使用されていたが，その後は配合飼料が普及し，現在は主として固形配合飼料が使用されている。
- 4) 種苗 本県は天然種苗に恵まれており，最初に指宿市で始めた業者は池田湖のものを用いた。他の所では1965年ごろまでは河川産を使用していたが，早期養成の必要から海産や湖産が利用されるようになり，最近では人工生産種苗も用いられている（熊本県天草や宮崎県の種苗業者から購入）。放養時期は，人工種苗では11月下旬から12月に池入するが，海産，湖産，河川産については，県の「稚あゆ特別採捕許可に関する取扱方針」で定められた下記期間に採捕されたものが使用される。

海産稚あゆ 1月15日～2月末日                      湖沼産稚あゆ 2月1日～4月30日  
 河川産稚あゆ 3月1日～4月30日

#### 4. 出荷

早期に放養されたものは商品サイズになる4月中旬から出荷が始まり，需用に応じて11月まで続く。7～8月が最盛期である。サンマが出回るころになると値段も安くなり，出荷は少なくなる。出荷先としては，県内では，鹿児島市中央市場のほか量販店，旅館，ホテル等であるが，量的には関西各都市や熊本，福岡等の県外市場が多い。

#### 5. 今後の課題

- 1) 用水 一般的に水資源が減少しており，他産業との関連もあって規模拡大は難しい状況である。飼育技術面での対策が必要である。
- 2) 病害対策 別項（急病の部）で述べる。
- 3) 種苗需給の安定 鹿児島県は河川産，湖産（鶴田ダム，池田湖）および海産など稚アユ資源が豊富であるが，業者は県内から必要量の入手ができず，県外の人工種苗の移入量も多い。県内業者が優先的に池入れできるよう実質的な需給調整指導が望まれる。
- 4) 早期種苗 早期種苗の供給養殖業者は12月中には人工種苗を池入れしており，また，琵琶湖産種苗を12月中に購入する業者もある。これら種苗の入手には輸送上の問題（歩留り，時間，経費等）があるので，県内で，現在より早く供給できないか検討が必要と思われる。

## 6. 参考文献

- 1) 指宿市 (1958): 内水面漁業. 指宿市誌, 382.
- 2) 鹿児島水試 (1935): 小鮎池中飼育委託試験. 昭和 10 年度 鹿水試事報, 55.
- 3) " (1936): " 昭和 11 年度 " , 55.
- 4) " (1937): " 昭和 12 年度 " , 28.
- 5) " (1963): 養鮎事業. 昭和 38 年度 鹿水試事報, 509.
- 6) 農林水産省 (1995): 平成 7 年 漁業・養殖業生産統計年報.

(小松 光男)